

## 幕末期徳川將軍書簡の古文書学的検討

Diplomatic Letters of the Tokugawa Shōgun in the Late Edo Era : Paleographical Analysis

ARAKI Kazumori

荒木和憲

はじめに

アメリカ国立公文書館の所蔵資料のなかには、『Record Group 59: General Records of the Department of State, 1763-2002』と分類された『Series: Notes from Japan Regarding the Treaty of Yedo, 1860-1862』と題する資料群が存在する。この資料群に関しては、国立歴史民俗博物館共同研究「近世近代転換期東アジア国際関係史の再検討」(研究代表者 福岡万里子)の一環としての概要調査が行われ、幕末期の徳川將軍書簡などに関する概報が公表されている(横山二〇二二)。

本稿は、同資料群のうち、徳川將軍書簡の古文書学的検討を試みるものであるが、筆者の専門は日本中世史であるから、幕末期の問題を論じることには躊躇を覚える。しかし、古代・中世日本の往復外交文書の総合的な検討を試みたことがあり(荒木二〇二〇・二〇二二)、幕末期を含め、前近代日本の往復外交文書を通時的に把握する必要性を感じているところである。そうした考えに至った背景について述べておきたい。

東アジア諸国の往復外交文書においては、皇帝・天皇文書や官文書の様式の外交文書よりも、むしろ私文書様式(書簡)の外交文書のほうが広範に通用していた。前者に関して例を挙げると、中国王朝の皇帝と周辺諸国の国王とのあいだでは、下行(下達)文書としての詔書・勅書、および上行(上申)文書としての表文などが往復し、東アジア諸国間では律令的官制の存在を前提として、国家・地方機関が相互に牒・咨文などを往復していた。これらは双方の名分上の関係性(上下・対等)を直截的にあらわすことに特徴がある。換言すれば、皇帝・天皇文書や官文書の様式には中国王朝の華夷意識、あるいはそれを模倣・受容した周辺諸国の華夷意識が多分に投影されている。

こうした外交文書の往復は二国間の軋轢を生みやすい。しかし、中世後期の日本の往復外交文書を見渡すと、皇帝文書・官文書の様式が使用された局面は日明関係に限定されており、朝鮮・琉球、さらには東南アジア・ヨーロッパ諸国とは私文書様式である書簡が使用されていた。書簡の場合、皇帝文書・官文書に比べれば、二者間の関係性を曖昧に表現

することができる。ただし、日朝往復書簡としての「書契」は、二者間の対等性を尊重する様式である。このように、書簡には二者間の関係性を曖昧に表現する、もしくは対等性を表現するという効用があったわけであり、それが現実の外交においてどのような役割を果たしていたのか、事例を積み上げながら追究する必要があるのである。

中世後期から近世前期にかけて、多様化する国際関係が書簡様式の外交文書によって処理されていたわけであるが、「鎖国」の成立にともない、書簡様式の外交文書の多様性は失われ、日朝・日琉・日蘭間を往復する書簡へと収斂したといえる。そうすると、幕末開港期に再び多様化する国際関係において、書簡様式の外交文書がどのようにして多様化の途をたどったのかは、ひとつの論点となりえよう。こうした問題関心にもとづくならば、幕末期の徳川將軍書簡は恰好の検討対象となるわけであり、またその原本を古文書学的手法で分析することも有効であると考ええる。

そこで、本稿においては、幕末期の徳川將軍書簡の古文書学的検討、すなわち形態論的・様式論的検討を行うとともに、書簡ごとの形態・様式の差異に着目し、そこから幕府の対外姿勢の一端を照射してみたい。

### 一 徳川家定漢文書簡(安政五年)

安政五年(一八五八)五月六日付の徳川家定漢文書簡は、アメリカ大統領フランクリン・ピアースを名宛人とする。日米修好通商条約をめぐる交渉の最終局面を迎え、その締結を躊躇した幕府が総領事タウンゼント・ハリスの要求に応じて作成し、当人に手交したものである(横山二〇二一・一七九頁)。

積文を示せば、左記のとおりである(【写真1】参照)。なお、原則として常用漢字を使用し、適宜、読点を付した。

【封上書】  
「返書」

肅復

重墨利加合衆国

大統領皮兒設殿(ピアース)

貴国往年以降屢求

兩國脩睦、幸慰靡鮮、且現今派領事官(ハリス)巴爾理士

為使節齎書翰、謀使

兩國人民、共通貿易、永以安寧、詞旨懇欵、感荷

曷已、乃宜以章程草案相示也、然期日不得不

緩者、以有我闔国会同商議之事也、幸諒察

之、併祈

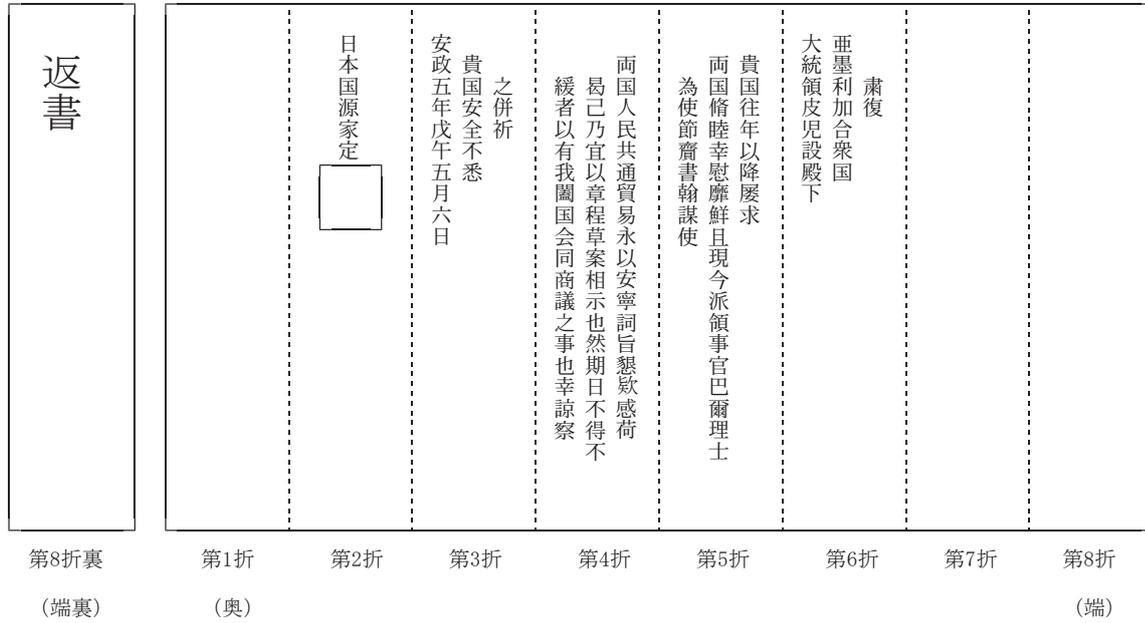
貴国安全、不悉、

安政五年戊午五月六日

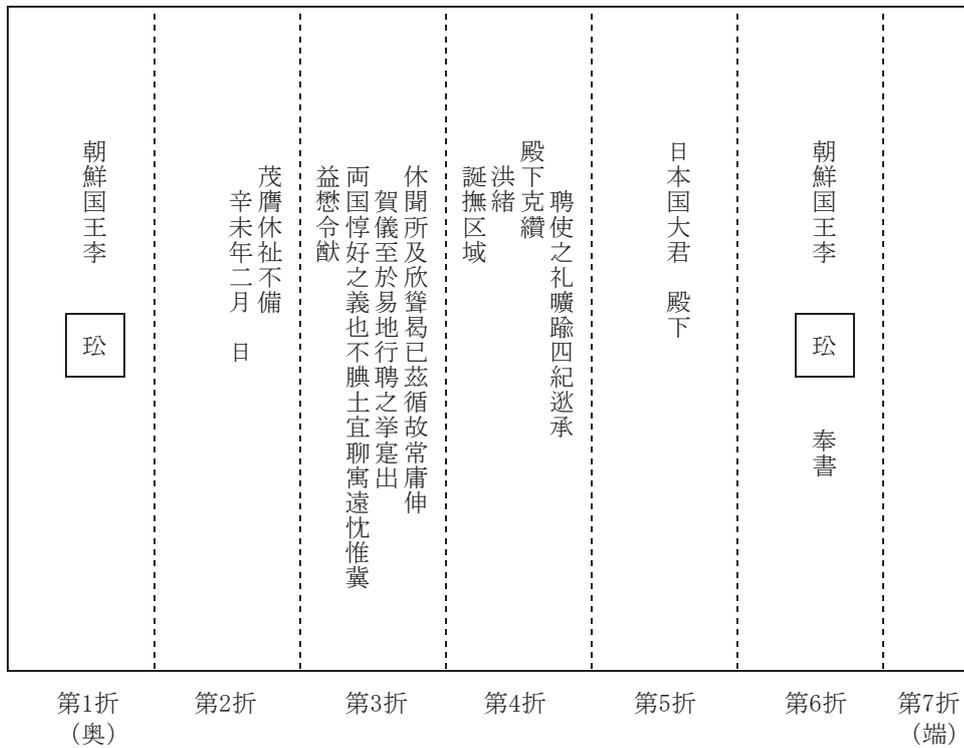
日本国源家定(朱文方印「経文緯武」)

つづいて、家定漢文書簡の形態を図示すれば、【図1】のとおりである。結論から先にいえば、中近世の日朝往復書契の様式(伊藤二〇〇二)を簡略化したものである。比較の対象として、文化八年(一八一)の朝鮮国王純祖書契と徳川家斉書契控(いずれも外務省外交史料館蔵)の模式図を掲げる(【図2】【図3】)。

日朝往復書契は、書簡の一種に位置づけられるわけであるが、発信者と受信者との名分上の対等性(敵礼関係)を前提として授受されるもので、随所に対等性・対称性を表現している(荒木二〇二〇・三一一～三三三頁・二〇二一・二三八～二三九頁)。外交におけるプロトコル(典礼)

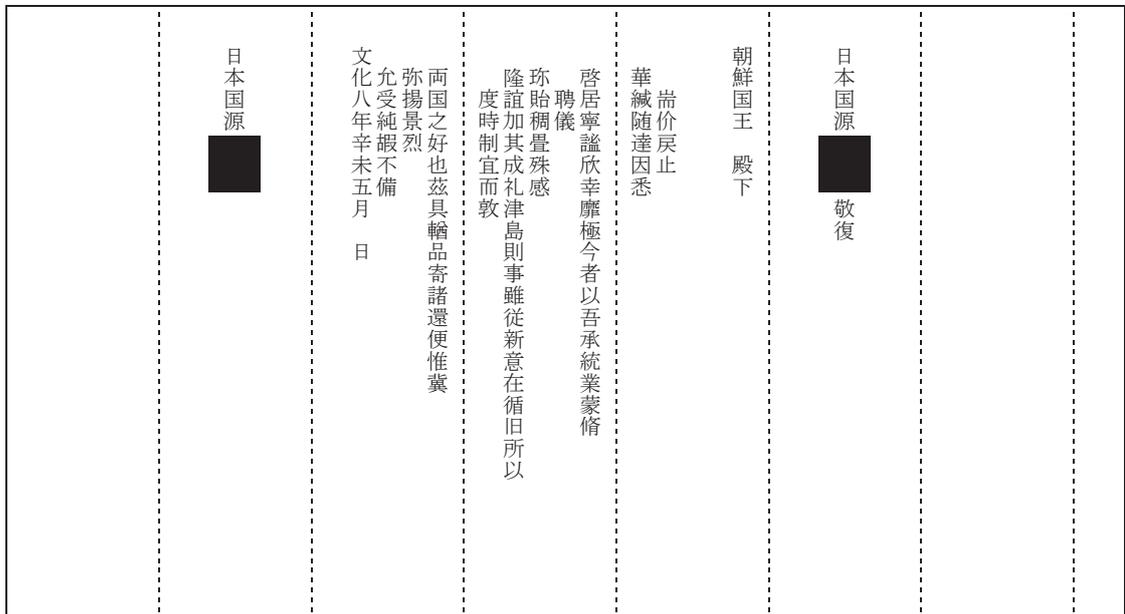


【図1】徳川家定漢文書簡(模式図)



【図2】朝鮮国王純祖書契(模式図)

【図3】徳川家斉書契控（模式図）



○控であるため、印影全体が朱塗りされ、諱が隠れている。

の一種といえよう。それが端的に表れるのが行頭の位置である。純祖書契（図2）は「朝鮮国王李 玠」、「日本国大君 殿下」、「殿下」（大君）を二字擡頭（双擡）し、家斉書契控（図3）は「日本国源 □□」（家斉）「朝鮮国王 殿下」「文化八年辛未五月 日」を二字擡頭する。いずれも日本国大君と朝鮮国王との対等性を表現している。

また、相互の行為等に対する敬意表現として、純祖書契は、家斉にまつわる語句として、「洪緒」（事業）、「誕撫」（意のままに統治する）、「休聞」（名声）、「益懋」（益ます懋め）、「茂膺」（茂めて膺げよ）の五か所、ならびに「両国」の二か所に一字擡頭（单擡）を施す。一方、家斉書契は、純祖にまつわる語句として、「華絨」（書契）、「啓居」（生活）、「珎貽」（贈品）、「隆誼」（厚誼）、「弥揚」（弥いよ揚げ）、「允受」（允に受けよ）の六か所、ならびに「両国」の二か所に一字擡頭（单擡）を施す。

双方ともに文体は漢文体、書風・字体は細字の楷書体とする。文字を細字で認めるのは相手への敬意表現である（伊藤二〇〇二：二六頁）。楷書体を使用するのは、楷・行・草の区分にもとづき、楷書を使用することが敬意を示すことであると観念されたためであろう。

冒頭句（書出文言）は、純祖書契が返信文言の「奉書」（書を奉る）、家斉書契が返信文言の「敬復」（敬みて復す）を使用する。中近世の日朝往復書契における冒頭句としては、目上・長属に使用できる丁寧な文言である「奉書」（廣瀬二〇一八：一章）を使用することが多い。「奉書」は返信文言であり、それに対応する返信文言が「奉復」であるから、「奉書」と「奉復」は同等の敬意を払ったものといえる。ただし、「奉復」の「奉」の字は、下位者から上位者への上行（上申）文書というニュアンスを帯びるため、幕府側は「奉」の字を避けて、丁重ではあるが上行文書としてのニュアンスを含まない「敬」を選択し、「敬復」としたのであろう。

結尾句（書止文言）は、双方ともに「不備」とする。日朝往復書契に

おいては、対等な二者間で使用される文言である「不宣」「荒木二〇二一…二三二頁」が使用されることが多いが、ここでは「不備」を使用している。「不宣」と「不備」のどちらが厚札なのかは未詳であるが、相互に「不備」を使用しあうことで、対等な敬意を払っているのである。

このように、書風・字体・文言などを意識的に選択し、相互に同等の敬意を払うのが基本的なあり方であったが、將軍（大君）の書契には、そうしたプロトコルの制約を受けつつも、朝鮮に対する優位を保とうとする作為が見受けられるのである。

前置きが長くなったが、ここからは家定漢文書簡（写真1）【図1】について検討していきたい。文体は漢文体、書風・字体は細字の楷書体、冒頭句は「肅復」（肅みて復す）、結尾句は「不悉」とする。行頭の位置は、「亜墨利加合衆国」「大統領皮兒設殿下」「安政五年戊午五月六日」「日本国源家定」を二字擡頭、「貴国」「両国」を一字擡頭する。ここでは將軍（大君）と大統領は対等な存在とされている。日朝往復書契の様式【図2】【図3】とほとんど変わるところがなく、基本的にはこれを踏襲したものとみてよい。

ただし、相違点も見受けられる。日朝往復書契の場合、純祖書契の料紙は厚手で大型の楮紙打紙で、法量は縦四九・六cm×横二二八・二センチメートル、厚さは〇・五ミリメートルである（田代二〇〇七）。家斉書契控の料紙は、厚手で大型の鳥の子紙を金銀で装飾したもので、法量は縦五一・一センチメートル×横九〇・五センチメートルである（下関市立歴史博物館二〇一八）。朝鮮国王書契は装飾のない素紙であるのに対し、將軍書契は装飾料紙であるという点においては、非対称なかたちをとっている。外交文書に装飾料紙を使用することは、自尊心の発露とみなされるため（後述）、料紙の選択においても、朝鮮に対して優位を保とうとする作為があったといえるわけであるが、家定書簡の場合は素紙を使

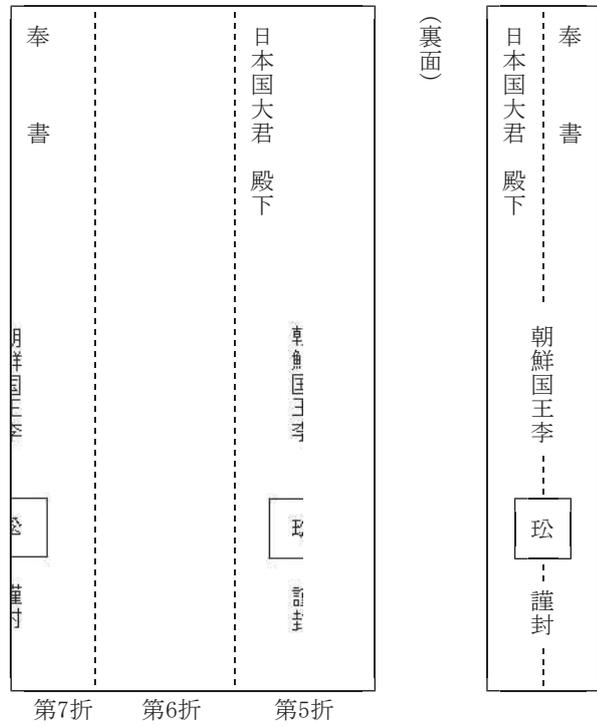
用している。なお、家定書簡の料紙の法量（計算値<sup>①</sup>）は縦四七・〇センチメートル×横八三・五センチメートルであるから、家斉書契控とほぼ同程度である。

もう一つの相違点は、差出書・押印・封式の作法である。日朝往復書契の場合、純祖書契を例にとると、端（冒頭）と奥（末尾）の二か所にわたって差出書と押印を施す【図2】。また、料紙裏面の第七折の上方に「奉書」、第五折の左半上方に「日本国大君 殿下」と記し、第七折と第五折が重なる部分に「朝鮮国王李瑛（押印） 謹封」と割書・割印を施す【図4】。こうした封式を「合衿」という。これに対して、家定漢文書簡の差出書・押印は末尾のみであり、封式は「合衿」の作法を採らず、端裏に「返書」と大書するのみである【図1】。

このように、細部に手間をかけた日朝往復書契と比較すると、家定書簡はその形態・様式を踏襲しつつも、料紙・差出書・押印・封式を簡略化したものとなる。もちろん家定漢文書簡は急仕立てされたものであるため、装飾料紙を用意するだけの時間の余裕がなかった可能性も考慮する必要があるが、差出書・押印・封式の簡略化は、意図的な薄礼化とみられる。

ここで注目したいのは、外交儀礼上の朝鮮とアメリカとの位置づけの相違である。ハリスの將軍拝謁儀礼を朝鮮・琉球使節のそれと比較した佐野真由子氏（佐野二〇一六・第三章）によると、幕府はアメリカを朝鮮よりも下位、琉球よりも上位に位置づけていたという。これを外交文書に引きつけて考えるならば、將軍は琉球国王に直接文書を発することなく、老中書状で対応していたわけであるから、アメリカ大統領に將軍書簡を発したのは、琉球国王よりも厚礼の対応であったことになる。しかし、アメリカ大統領を朝鮮国王よりも下位に位置づけるのであれば、日朝往復書契の様式をそのまま転用するわけにはいかない。それゆえ、様式の一部を簡略化（薄礼化）することで差別化を図ったのである。と

【図4】朝鮮国王純祖書契の「台衿」(模式図)



りわけ、差出書に省略がみられるのは、大君たる家茂の姓名をむやみに書き表すことを避けたためであろう。

差出書は奥(末尾)の「か所のみとされたわけであるが、押印の方法、および印文の選択にも相違がある。従来は差出人の諱に重ねて押印するのが慣例であった。これは私文書様式(私信形式)である書簡の特徴である(荒木二〇二一・二三八〜二四四頁)。私印である「凶書」(木村二〇二一・九章)の印文には、諱のみ、姓+諱の二つのパターンがあるわけであるが、初代家康の「源家康忠恕」印、二代秀忠の「源秀忠」印は(古川二〇一九・一九三頁)、そうした中世以来の原理を踏襲したもので、発信者の人格性を強く表現したものと見える。

その後、三代家光は諱を避けて「源忠徳」印を使用し、四代家綱の「源監国」印、五代綱吉の「源忠敬」印、八代吉宗の「源」印、九代家重の「源表正」印、十代家治の「源寛裕」印に継承された。この間の例外としては六代家宣の「文命之宝」印がある。十一代家斉が「克綏厥猷」印を使用して以後は、十二代家慶の「恭敬温文」印、そして十三代家定・十四代家茂・十五代慶喜の三代にわたる「経文緯武」印へと続いた(以上、古川二〇一九・一九三頁)。家光から家治までは諱を避け、その代替として將軍個人が帯びる儒学的徳目を二字の漢語で表したのに対し(吉宗を除く)、家斉以降は、姓をも避け、將軍個人の徳目または統治理念を四字の漢語で表すという変化が認められる。「克綏厥猷」(克く綏の猷を綏んず)は政道を安定させること、「恭敬温文」は謙虚・温和で礼儀にかなうさま、「経文緯武」(文を經とし武を緯とす)は文武を統べることを意味する。

このように、將軍個人の人格を表すという原理的な意味が印文から失われ、將軍の統治理念を示すものへと変化するわけであるが、とりわけ家定の代に製作された「経文緯武」印が家茂・慶喜に継承されたことは、この印に將軍家に世襲される外交印としての性格が付与されたことを示している(古川二〇一九・二〇三頁)。

ただし、印文に「武」の字を使用したのは、外交儀礼上、不穏な措置と言わざるをえない。朝鮮に対して家宣が「文命之宝」印(印文の考案者は新井白石(古川二〇一九・一九六〜一九九頁)、家慶が「恭敬温文」印を使用し、「日本国大君」が「文」(文明・礼儀)を尊ぶ存在であると表現したことは対照的なのである。付言すれば、朱子学を政治思想の根幹とする日朝両国の外交において、「文」の尊重を強調することは、平和的・友好的なメッセージとなるものである。そうした歴史的文脈に照らしたとき、「経文緯武」印を採用し、「文」だけでなく「武」をも強調したことは、アメリカを文明国ではない夷狄とみなしたも同然といえ

よう。国内における攘夷論の高まりを背景として、將軍が「武」(武威)にもとづき対米交渉を主導しているかのように装ったものと考えられる。

## 二 徳川家茂和文書簡(安政七年)

安政七年(万延元・一八六〇)正月十六日付の徳川家茂和文書簡は、大統領ジェームズ・ブキャナンを名宛人とする。万延元年閏三月二十八日(一八六〇年五月十八日)、条約批准書の交換を使命とする遣米使節がホワイトハウスでの謁見儀礼に臨んださい、正使新見正興によってブキャナンに手交されたものである(横山二〇二二・一七五頁)。

積文を示せば、左記のとおりである(【写真2】参照)。

うや／＼しく亜墨利加合衆国の

大統領のみもとにまをす、さきに

下田奉行信濃守源清直・目付

肥後守藤原忠震等におほせて

そのくにの欽差全権巴兒リスとはかり、

むつひののりをさためて、ものうり

かふへきちきりのしるしふミをあたくへ

江戸のつかさにゆきかひせしむ、いま、た

ことに奉行豊前守源正興・淡路守

源範正・目付豊後守源忠順等に

ちきりのしるしふミをもたしめて

華盛頓のつかさにいたらしむ、

このこときハめていたりふかく、こゝろいと

ねもころなり、かれこの、ちふたくにの

したしみもいよくあつくましらひは、

世々にかはらざるへし、いまこのつかひ  
 (三人) (臣) (撰) (設)  
 みたりのおミはさらにえらひまけたる  
 (者) (真) (心) (伸)  
 ものにしあれは、ともにまこゝろをのハへて  
 (言) (語) (伸)  
 ことはかられよかし、すへてしたしミを  
 あつくし、またそのくにたひらけく  
 (安) (思)  
 やすけからむことをおもふにこそ、

安政七年正月十六日

源家茂(朱文方印「経文緯武」)

まず目を惹くのは料紙である。二紙を継いだもので、法量は縦四五・七センチメートル×横一八二・〇センチメートル(第一紙は九三・〇センチメートル、第二紙は八九・〇センチメートル)、厚さは〇・二ミリメートルである(横山二〇二二)。大型かつ厚手の料紙といえる。日朝往復書契で統紙を使用した例はなく、新しい料紙の使い方である。和文(擬古文)を採用して長文となったことから、それに対応して統紙を使用したものと考えられる。

紙質は鳥の子紙で、金泥をふんだんに使用し、金銀の切箔を散らして折枝文を表している。副使村垣範正の『航海日記』には「御国書の金泥花鳥を画たる料紙」とあるが(吉田一九六〇・一五二頁)、この記録とは文様が異なる。現存する清書本は、ポーハタン号の品川出航の直前に井伊直弼の腹臣長野主膳によって差し替えられたものであるから、「金泥花鳥を画たる料紙」とは差し替え前の書簡の料紙を指しており、村垣らも差し替え後の書簡の料紙が何であるかを詳しくは認識していなかったのであろう。

金銀裝飾料紙を使用する外交書簡の現存例として最も古いのは、天正

十九年（一五九一）に豊臣秀吉が「小琉球」（スペイン領ルソン）に宛てた書簡である。料紙の紙質は、厚手の鳥の子紙である（清水二〇一九）。こうした料紙を秀吉が採用したのは、装飾豊かなポルトガル・インド副王書簡（一五八七年、妙法院蔵）を受け受したことと端を発するもので、諸外国に対してみずからの権威を誇示しようとしたものと考えられている（岩生一九八六）（清水二〇一九）。

江戸幕府はこれを踏襲し、対朝鮮外交において、將軍書契および老中書契に金銀装飾料紙を使用することとなった。韓国側で原本は確認されていないが、日本側に伝わる控としては、徳川綱吉書契控（藤井齊成会有隣館蔵）・徳川家重書契控（同）（文化庁一九八八）、徳川家齊書契控（外務省外交史料館蔵）〔下関市立博物館二〇一八〕のほか、老中酒井忠恭書契控（早稲田大学蔵）〔国立歴史民俗博物館二〇一八〕などが挙げられる。先述のとおり、日朝往復書契には、名分上の対等性を相互に尊重するというプロトコルが埋め込まれているわけであるが、料紙に関しては、朝鮮国王書契・礼曹判書書契が素紙を使用するのに対し、將軍書契・老中書契が金銀装飾料紙を使用するという非対称性が看取される。金銀装飾料紙に自尊心が込められているとすれば、プロトコルの制約を受けつつも、朝鮮に対する優位性を主張しようとする意図があったこととなる<sup>(4)</sup>。

こうした外交文書における金銀装飾料紙の使用例に鑑みれば、家茂和文書簡にも大君としての自尊心を読みとることができよう。家茂和文書簡は、公使のハリスに託したわけではなく、初の遣米使節が携行・伝達したものである。『航海日記』（吉田一九六〇）によると、万延元年閏三月二十八日（一八六〇年五月十八日）、遣米使節が大統領に謁見したさい、正使新見正興が通訳を交えて「御誼の趣」を述べたのち、「御国書」を内箱から取り出し、剥き出しの状態<sup>(5)</sup>で大統領に手交している。「御国書」の伝達儀礼の場でアメリカ側が開披する可能性を想定したうえで、

大君の権威を視覚的に誇示するために金銀装飾料紙を選択したものと考えられる。さらにいえば、日米間には言語のギャップが存在するわけであるから、そうした形態的な側面のほうが大君の権威を演出するうえで効果的であったといえよう。

このことは、和文書簡の清書本とともに現存する蘭語書簡の料紙と比較することで、より明瞭となる。蘭語書簡の料紙は、公開画像の質感から判断すれば、料紙は厚手の鳥の子紙で、装飾のない素紙である。『航海日記』によると、「横文」（横書きの書簡）の料紙は鳥の子紙であった（吉田一九六〇・一五六頁）。それゆえ、儀礼的な性格を帯びる和文書簡に装飾料紙を使用し、実務的な位置づけである蘭語書簡には素紙を使用することで、差別化を図ったものとみられる。

つづいて、文体・書体の側面について検討したい。文体は和文体（漢字仮名混用文・擬古文）、書風・書体は細字の行書体である。従来、日朝外交における將軍書簡・老中書簡は大学頭林家の管掌（田中一九九六・二二一―二六頁）のもとで漢文体・楷書体で作成されてきたが、ここでは和文体・行書体が採用されている。文体が和文体であるという性質上、書体も楷書体よりは行書体のほうが親和的ではあるが、楷・行・草という伝統的な価値観に照らせば、厚札から薄札へ変化したとみることもできる。

書出文言（冒頭句）は「うやくしく亜墨利加合衆国の大統領のみもとにまをす」であり、書止文言（結尾句）はない。行頭の位置については、本文に擡頭は一切なく、年月日を「二字分低くするのみである。それに対して、差出書の「源家茂」と押印は本文よりも高い位置に据える。日本古文書学でいうところの「奥上判」を採用したもので、尊大な様式といえる。しかも、「源家茂」の三字は、本文の文字よりも明らかに肥大である。この三字のサイズ（計算値）は、縦一一・三センチメートル×横三・八センチメートルである。従来の日朝往復書契が細字（極細

字)によって相手への敬意を示してきたこと〔伊藤二〇〇二二六頁〕と対照すれば、差出書のみを太字で大書し、名宛人の「亜墨利加合衆国の大統領」を相対的に小さく細く書く作法は、尊大(薄礼)であるというほかない。

東アジア諸国の皇帝文書・官文書は上下・対等関係を直截的に明示することを特徴とし、それは擡頭・平出・闕字という視覚的表現や語句の選択に表れる。私文書(書簡)の場合も、そこまで厳密ではないにしろ、文書を授受する二者間の関係性を示してきたのであり、とりわけ日朝往復書契の場合は、名分上の対等性を相互に尊重するというプロトコルに大きく制約されていた。それに対して、家茂和文書簡は、従来の漢文書簡や日朝往復書契に埋めこまれていたプロトコルから解放され、独自の様式を採用したものと見える。

以上のように、家茂和文書簡は、料紙に金銀装飾料紙を使用し、文体・書体を和文体・行書体とし、差出書のみを擡頭・大書し、かつ「経文緯武」印を押して「武」(武威)を示すという特徴が認められる。これらの要素が一体となって大君の権威を演出しているわけである。

外交儀礼において、拜礼という身体的行為に対する拒絶反応が生じることは普遍的にみられるわけであるが、日米間の外交書簡の場合、両者に言語・文化のギャップが存在するため、いくら大君の権威を誇示した様式・形態・文面を選択・使用しようとも、アメリカ側がその意図を理解して拒絶反応を起こす可能性は低い。逆にいえば、大君の権威を誇示することの外交上の効果は薄いわけであり、やはり自尊心を満たすための内向きの作為であったといえよう。

### 三 徳川家茂和文贈品目録(安政七年)

年月日と差出書・名宛書はないが、関連する記録類、ならびにスミソニアン研究機構蔵「幕末日本関係コレクション」の器物類との照合に

よって、徳川家茂から大統領ジェームズ・ブキャナンへの公式の贈品を列記した目録、すなわち安政七年(万延元・一八六〇)正月十六日付の家茂和文書簡の付属文書であることが判明している〔福岡・日高・澤田二〇二一(6)一一八〜一一九頁〕。

積文を示せば、左記のとおりである〔写真3〕参照。

#### 〔封上書〕 「目録」

太刀	二振
馬具	一揃
掛物	十軸
翠簾屏風	五双
純子幔幕	二張
大和錦	十卷
書棚	一架
料紙硯箱	一組

以上

外交儀礼において贈品の授受は不可欠であり、その品目・数量が外交文書に記載されることになる。外交文書の本紙の本文中に記載されることもあるが、別紙に記載されることが多い。東アジア諸国では、これを「別幅」〔橋本二〇一九〕と称することもある。総じて「別幅」に贈品の品目・数量を記載するという作法のほうが厚礼とみることができ(荒木二〇二一(7)二三三〜二三六頁)。

日朝往復書契に添付される贈品目録は「別幅」と称される。徳川將軍の別幅としては、延享五年(寛延元・一七四八)の徳川家重別幅控(藤

井斉成会有隣館蔵、【図5】（文化庁一九八八）が伝わる。料紙は厚手の鳥の子紙に金の装飾を加えたもので、全文を楷書体の小字で記す。冒頭に「別幅」と記したのち、贈品の品目・数量を列挙し、「整」の語で締める。最後に年月日と差出書・押印を施す。基本的に書契（本紙）の形態・様式に準じたものである。

これに対して、家茂和文贈品目録（写真3）【図6】の料紙は、鳥の子紙を使用するが、装飾のない素紙である。本紙としての家茂和文書簡（写真2）が金銀装飾料紙であることと対照すれば、別紙にあたる贈品目録の料紙はきわめて簡素である。そして、同質の料紙を使用した封紙に「目録」と上書する。目録の本紙は品目・数量を記し、「以上」で締めるのみである。日朝往復書契に付属する「別幅」とは形態・様式両面において異なっており、むしろ日本国内の書札様文書の様式（進上目録）を適用したものである。

そこで注目されるのが、琉球国王宛の老中連署書状に付属する贈品目録である。年末詳の計一〇通が伝わる（東京国立博物館蔵）〔東京国立博物館二〇〇二〕。いずれも冒頭に「目録」（または「もくろく」と記したのち、贈品の品目・数量を列記し、「以上」で締める。年月日の記載はない。封紙はなく、端裏に「目録」と記すものが六通（うち一通を【図7】として示す）、何も記さないのが四通となる。

家茂和文贈品目録は、基本的に琉球国王宛の老中贈品目録の様式を転用したものとすることができる。ただし、老中贈品目録に封紙がないのに対し、家茂和文贈品目録には封紙が付されている。アメリカ大統領への一定の敬意を払ったものといえよう。将軍拝謁儀礼において、アメリカを朝鮮よりも下位、琉球よりも上位に位置づけようとする指向があったこと〔佐野二〇一六・三章〕に鑑みれば、贈品目録の形態の細かな違いのなかにも、厚札と薄札との使い分けがなされていたことが読みとれるのである。

【図5】 徳川家重別副控（模式図）

別幅 貼金六曲屏風式拾双 描金鞍具式拾副 擦金紙匣伍副 擦金硯匣伍副 染絵巻百匹 綵紬式百端 整 延享五年戊辰六月 日	日本国源 家重
---	------------

目録		以上	料紙硯箱 書棚	大和錦	純子幔幕	掛物	馬具	太刀
			一組 一架	十卷	二張 五双	十軸	一揃	二振

【図6】徳川家茂和文贈品目録(模式図)

目録		以上	大紋羽二重	白銀	目録
			百端	二百枚	

【図7】江戸幕府老中贈品目録(模式図)

#### 四 徳川家茂和文書簡(文久元年・同二年)

文久元年(一八六一)三月二十三日付の徳川家茂和文書簡は、大統領エイブラハム・リンカーンを名宛人とする。安政五か国条約が定める江戸の開市期限(一八六二年一月一日)、および兵庫・大坂の開港・開市期限(一八六三年一月一日)の延期を要請するものである(新潟の開港・開市は保留中)。弁理公使タウンゼント・ハリスの勧告などを受け、各国元首宛で一斉に作成された書簡群のうちの一通である(石井一九六六・六五〜六七頁)〔横山二〇二二・一八〇頁〕。  
積文を示せば、左記のとおりである〔写真4〕参照。

恭しく亜墨利加合衆国

大統領のもとに申す、我国と

貴国と条約を取結ひしより

このかた、数々の事務漸々についでを得て、条約の書に載る処、

大かたハ是を施すに至りぬ、

しかるに彼条約の中、兵庫

および新潟の港を開き、また

江戸・大坂の市町にて外国の人

もの商ふ業を営むへき条は、

契りし如く行なハむとすれども、

かすく障の事あれば、暫く

開くへき期を延むとす、その細やかなる事からハ、

外国の事務に關れる我

老中久世大和守・安藤対馬守より

貴国外国事務大臣に申入へし、こハ

親しく懇なる意をもて、むへなはむことを  
求む、且貴国平安をこれ祈る也、

文久元辛酉年三月廿三日

源家茂(朱文方印「経文緯武」)

文久元年(一八六一)の家茂書簡の料紙は、二紙を継いだもので、法量(計算値)は四三・一センチメートル×一五八・八センチメートル(第一紙は八二・三センチメートル、第二紙は七六・五センチメートル)である。紙質は鳥の子紙であり、金の装飾を加えるが、安政七年(一八六〇)の家茂和文書簡に比べれば、簡素化されている。遣米使節が大統領に直接手交した安政七年和文書簡とは異なり、公使ハリスに託されたものであるから、儀礼性を薄めたものとみられる。文体・書体は和文体・行書体である。ただし、和文体とはいっても、安政七年和文書簡のような擬古文ではなく、実務的な文章である。

書出文言は「恭しく墨利加合衆国大統領のもとに申す」であり、安政七年和文書簡の「みもと」(御下)が「もと」(下)に変化したことがわかる。「みもと」「もと」は漢文書簡における敬称に相当するものであり、「みもと」から「もと」への変化は、あえていえば、「殿下」から「閣下」「閣下」に格下げしたようなものである。また、差出書の「源家茂」の三字のサイズ(計算値)は縦一四・八センチメートル×横三・八センチメートルである。安政七年和文書簡と比べ、縦方向に大きく肥大し、より尊大化している。

総じて形態面の簡素化と様式面の薄礼化が進んでいるわけであるが、これは遣米使節の視察によって、大統領が民衆から選出された「惣督」であって、「国君」ではないこと(『航海日記』、〔吉田一九六〇・一五四頁〕

が実地に確認されたことも影響していよう。つまり、大君と「惣督」との格差を表現するため、微妙な操作が施されたものと考えられる。少し視点をずらすと、幕府側はハリスの二度目（安政六年）の將軍拜謁儀礼を、初度（安政四年）よりも簡略化しようとしたため、ハリスの反発を買っている（佐野二〇一六：二〇六～二二二頁）。將軍拜謁儀礼と外交文書の両面において、幕府側は外交儀礼の簡素化と薄礼化を指向していたことになる。

つづいて、文久二年（一八六二）四月七日付の家茂和文書簡は、大統領リンカーンを名宛人とする。弁理公使ハリスを本人の希望によって召還する旨を伝えた、一八六一年十一月十四日付のリンカーン書簡に対する返書である<sup>8</sup>。

積文を示せば、左記のとおりである（【写真5】参照）。

恭敬して

余れ亜墨利加合衆国マリーエステイト

大統領に復す

貴国欽差大臣トウンセントハリス儀、

婦国の望みあるにより、其段許允

されし趣領諾せり、同人我国に久々

在留し、其職掌精勤せしを感じ、且

殿下の其人を得て差越せしに依り、双方

臣民の幸福なる事、則ち殿下友誼

の至渥なるを徴するに足れり、なを

委細の儀者老中より

貴国事務大臣江可申入候、

文久二戌年四月七日

源家茂（朱文方印「経文緯武」）

料紙は二紙を継いだもので、法量（計算値）は縦四四・五センチメートル×横一一・九センチメートル（第一紙は七一・〇センチメートル、第二紙は四八・五センチメートル）である。第二紙は切紙であり、安政七年・文久元年の書簡が左右（端・奥）の余白を均等になるよう調整していたのに対し（【写真2】【写真4】、左（奥）の余白を縮めたかたちとなっている。紙質は厚手の鳥の子紙であるが、装飾のない素紙である。総じて簡素化が進んだものといえる。

文体・書体は、文久元年の和文書簡と変わらない。書出文言は「恭敬して余れ亜墨利加合衆国マリーエステイト大統領に復す」である。この表現は、安政五年の漢文書簡の「蘭訳」（蘭訳のベースとなった和文）の書出文言「亜墨利加合衆国大統領マリーエステイト（敬語）フランクリン・ピールス江<sup>9</sup>」と類似するため、欧米の文書様式を採用したものとみることもできる。ただし、東アジアの伝統的な外交文書のあり方に照らせば、敬称の「もと」を省略することは、大統領を呼び捨てにすることであり、やはり薄礼化の延長線上に位置づけられよう。差出書の「源家茂」の三字のサイズ（計算値）は縦一六・〇センチメートル×横四・五センチメートルである。文久元年の書簡よりも、さらに縦方向へ肥大し、尊大化が進んでいる。

このように、文久年間には將軍書簡の様式面の薄礼化と形態面の簡素化が看取される。もちろん、初の遣米使節が伝達した安政七年和文書簡が特異である点には留意しなければならないが、大君と「惣督」（大統領）との格差を意識し、従来の「日本型華夷秩序」（荒野一九八八）のなかで日米関係を処理しようとする意図が窺えるのである。

將軍書簡の様式面での薄礼化は、アメリカ以外の西欧諸国に対しても

同様に認められる。現存する文久元年十二月二十日付のプロイセン国王宛徳川家茂信任状〔国立歴史民俗博物館二〇一五〕は、冒頭を「謹て宇漏生国王に申す」として敬称を省略し、差出書の「源家茂」を大書し、かつ奥上判としている。差出書のサイズ（計算値）は縦一三・八センチメートル×横四・二センチメートルであり、同年のアメリカ大統領宛書簡のサイズに近い。

ただし、形態面では金銀装飾を凝らした料紙を採用している。文久遣欧使節が携行する信任状であることに鑑み、万延遣米使節が携行した書簡と同様に美しい料紙を使用し、大君の権威の演出を図ったのであろう。つまり、儀礼的要素の強い文書であれば美しい料紙を使用し、実務的要素の強い文書であれば素紙を使用するというように、料紙を選択的に使用したのと考えられる。それゆえ、様式面における薄礼化は、必ずしも形態面に反映されるわけではないのである。<sup>10)</sup>

## おわりに

アメリカ国立公文書館が所蔵する徳川將軍書簡について、その形態と様式の特徴を考察してきた。最後に考察結果を簡略に整理したい。

安政五年の徳川家定漢文書簡は、従来の日朝往復書契のプロトコル（対等性の尊重）に制約されつつも、それを簡略化したもので、名分（礼制）上、アメリカを朝鮮よりも下位、琉球よりも上位に位置づけたものである。

安政七年（万延元年）の徳川家茂和文書簡は、遣米使節が直接大統領に手交して開披される可能性を想定し、美しい金銀装飾料紙を使用したとみられるわけであるが、そこには相手側への敬意を読みとることはできず、むしろ自尊心が発露されている。一方、様式面では日朝往復書契のプロトコルから解放され、従来よりも大君の権威を演出しやすくなった。それは差出書・押印方法に最も顕著に表れている。なお、付属

文書である和文贈品目録の様式は、琉球国王宛の老中贈品目録よりも厚礼であるが、朝鮮国王宛の別幅よりも薄礼である。

文久元年・文久二年の家茂和文書簡は、形態面の簡素化と様式面の薄礼化が進んでおり、それは料紙の簡素化と差出書の肥大化として顕著に表れている。

徳川將軍書簡の形態・様式から窺えるのは、従来の「日本型華夷秩序」と近代条約体制という相反する国際関係の枠組みを縫合し、国際社会にむけては大君の権威を演出しつつ、国内政治においては攘夷論を抑えて開港政策を推進する、という將軍・幕府の政治姿勢なのである。

## 註

- (1) アメリカ国立公文書館は法量のデータを公開しておらず、また原則的に熟覧調査も許されていない。このため、安政七年の家茂書簡の「経文緯武」印の印影の法量（縦九・〇cm×横九・一cm）〔横山二〇二二〕、および文久元年のプロイセン国王宛家茂信任状の同印影の法量（縦九・〇cm×横九・二cm）〔国立歴史民俗博物館二〇一五〕を基準値として、画像上で料紙の法量を計算した。
- (2) 横山伊徳氏のご教示による。
- (3) 横山伊徳氏のご教示による。
- (4) 近世初期の事例であるが、伊達政宗は慶長十八年（一六一三）九月四日付で和文書簡とラテン語文書簡をローマ教皇に送っている（ヴァチカン・アポストリカ図書館蔵）。いずれも鳥の子紙に金銀箔を散りばめた美しい料紙を使用しており、言語による料紙の使いわけは行われていない。
- (5) 日朝往復書契は袱紗の袋に包まれたのち、箱に納入されていたが〔伊藤二〇〇二〕、アメリカ大統領宛の書簡にそのような記述はみられない。
- (6) スミソニアン研究機構蔵「幕末日本関係コレクション」に含まれる徳川家茂の贈品に関しては、榊原悟氏が翠簾屏風に着目して先駆的な研究を行っている〔榊原二〇〇二・二三三～二四三頁〕。近年、国立歴史民俗博物館の調査によって、馬具と書棚についても、家茂の贈品である可能性が高まった〔福岡・日高・澤田二〇二二〕。
- (7) 厚礼の書簡を送る場合、しばしば贈品の品目・数量も豊富となる。それを書簡の本文中に記載するのは煩瑣となるので、いきおい別紙のリスト（別幅）が必要となる。結局のところ、礼の厚薄、別幅の有無、贈品の多寡は密接不可分な関係

にあるといえよう。

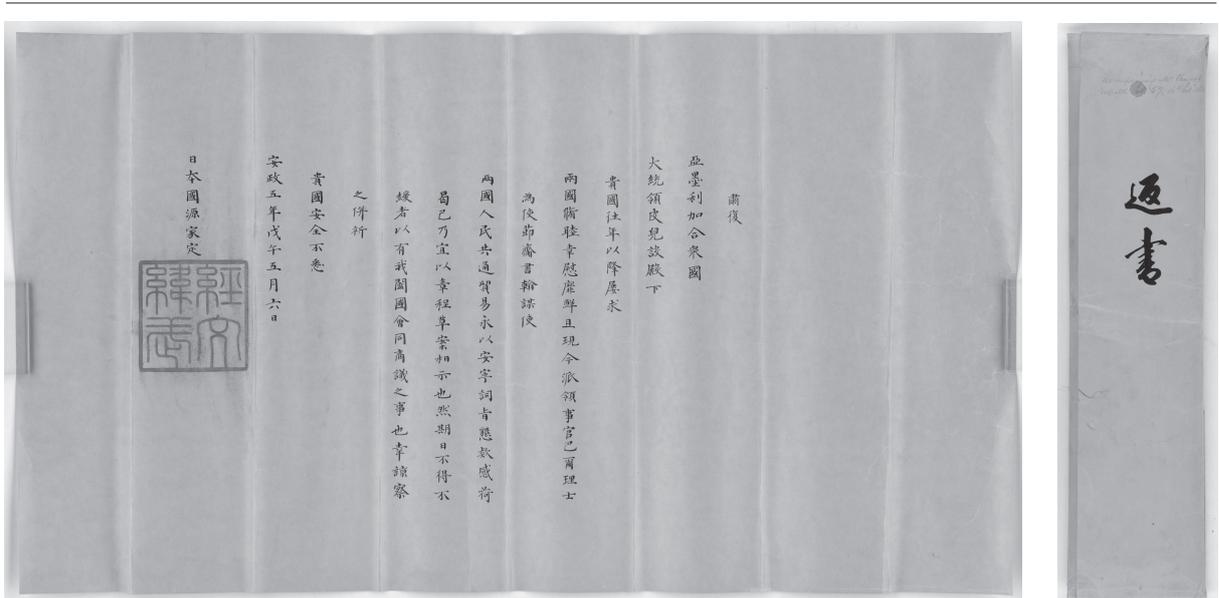
- (8) 『続通信全覽』編輯之部「米ハルリスの委任状 外六件」。  
 (9) 『大日本古文書』幕末外国関係文書二〇巻―九〇号文書。  
 (10) 美麗な金銀裝飾料紙の使用が薄札(尊大)であるという前提に立てば、裝飾性を抑えた裝飾料紙の使用、そして素紙の使用は厚札ということになる。しかし、様式面での薄札化が進行していながら、形態面のみが厚札化に向かうというのは理解しがたい。したがって、美麗な金銀裝飾料紙から素紙へという流れは、形態面の簡素化(さらにいえば経費の節減)、および儀礼性の有無ないし濃淡という観点から理解すべきであろう。

参考文献

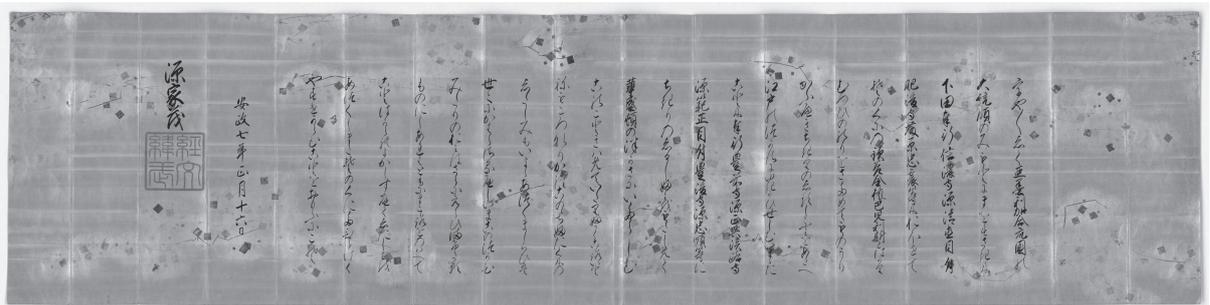
荒木 和憲 二〇二〇「中世日本の往復外交文書」(小島道裕・田中大喜・荒木和憲編『古文書の様式と国際比較』勉誠出版)  
 荒木 和憲 二〇二二「中世日本往復外交文書をめぐる様式論的検討」(『国立歴史民俗博物館研究報告』二二三)  
 荒野 泰典 一九八八『近世日本と東アジア』(東京大学出版会)  
 石井 孝 一九六六『増訂明治維新の国際的環境』(吉川弘文館)  
 伊藤 幸司 二〇〇二「現存史料からみた日朝外交文書・書契」(『九州史学』一三三)  
 岩生 成一 一九八六「文禄二年(一五九三)呂宋長官あて豊臣秀吉の書翰について」(『古文書研究』二五)  
 木村 拓 二〇二二『朝鮮王朝の侯国的立場と外交』(汲古書院)  
 榊原 悟 二〇〇二『美の架け橋』(ペリかん社)  
 佐野真由子 二〇一六『幕末外交儀礼の研究』(思文閣出版)  
 清水 有子 二〇一九「豊臣期南蛮宛て国書の料紙・封式試論」(松方冬子編『国書がむすぶ外交』東京大学出版会)  
 田代 和生 二〇〇七「朝鮮国書原本の所在と科学分析」(『朝鮮学報』二〇二)  
 田中 健夫 一九九六『前近代の国際交流と外交文書』(吉川弘文館)  
 橋本 雄 二〇一九「別幅と誤解された勅書」(前掲松方編著書)  
 廣瀬 憲雄 二〇一八『古代日本と東部ユーラシアの国際関係』(勉誠出版)  
 福岡万里子・日高薫・澤田和人 二〇二二「スミソニアン研究機構所蔵の幕末日本関係コレクション」(『国立歴史民俗博物館研究報告』二二八)  
 古川 祐貴 二〇一九「徳川將軍の外交印」(前掲松方編著書)  
 横山 伊徳 二〇二二「米国立公文書館所蔵万延元年遣米使節関係文書について」(『国立歴史民俗博物館研究報告』二二八)  
 吉田 常吉 一九六〇『航海日記』(時事新書)

国立歴史民俗博物館 二〇一五「ドイツと日本を結ぶもの」(展覧会図録)  
 国立歴史民俗博物館 二〇一八「日本の中世文書」(展覧会図録)  
 下関市立歴史博物館 二〇一八「朝鮮通信使」(展覧会図録)  
 東京国立博物館 二〇〇二「東京国立博物館図版目録」琉球資料篇(中央公論美術出版文化庁 一九九八『国宝・重要文化財大全』一〇(毎日新聞社))

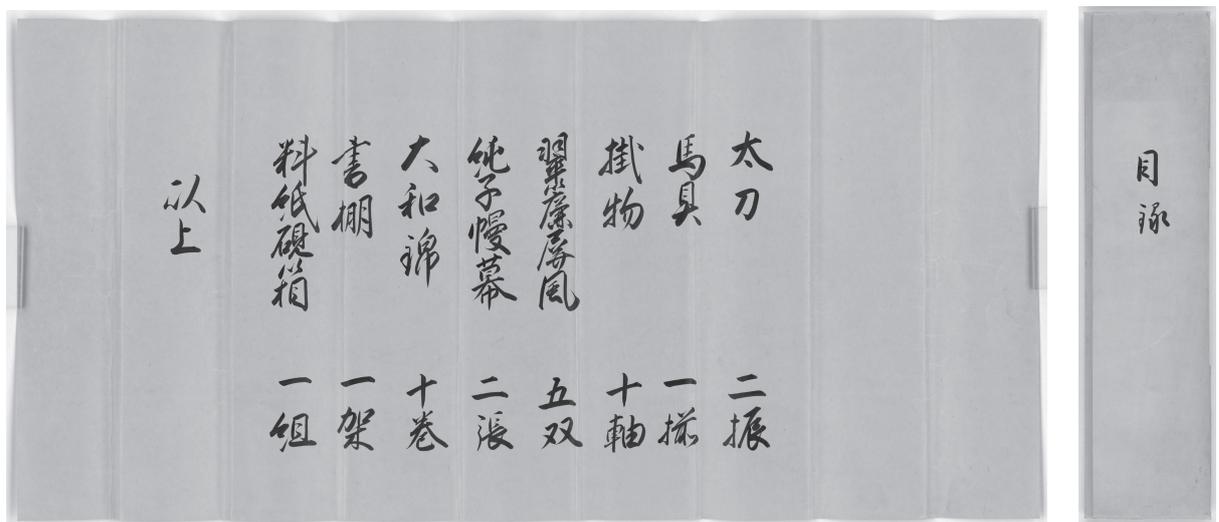
(国立歴史民俗博物館研究部)  
 (二〇二二年三月一六日受付、二〇二二年五月二三日審査終了)



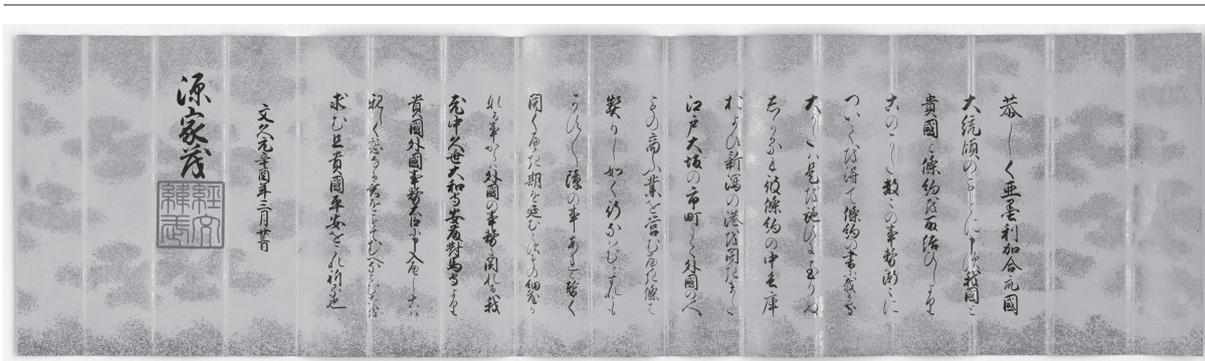
【写真1】徳川家定漢文書簡 安政5年(1858) アメリカ国立公文書館(NARA)蔵



【写真2】徳川家茂和文書簡 安政7年(1860) アメリカ国立公文書館(NARA)蔵



【写真3】徳川家茂和文贈品目録 安政7年(1860) アメリカ国立公文書館(NARA)蔵



【写真4】徳川家茂和文書簡 文久元年(1861) アメリカ国立公文書館(NARA)蔵



【写真5】徳川家茂和文書簡 文久2年(1862) アメリカ国立公文書館(NARA)蔵